

外国人児童が生き生きと学校生活を送るための日本語指導の実践

—日本語指導教室での実践を通して—

那知上 恵一 (会津若松市立松長小学校)

1.日本語指導教室の概要

勤務校には、外国人児童のための日本語指導教室が設置されている。現在、チュニジア、エジプト、ウクライナ等の6か国出身の児童10名が日本語の学習に取り組んでいる。本教室の児童の実態としては、全然日本語を話せない児童から、少しずつ日本語が理解できて話したり書いたりできるようになっている児童、さらには、教科学習のための日本語を学習している児童まで、学習歴によって様々である。

2.研究のねらい

本発表は、3名の外国人児童(以下A児、B児、C児)を対象に「話す・聞く」や「書く」の日本語の指導をすることによって、在籍学級において学習や遊びに対して主体的になり、生き生きと活動できるようになることを、日々の児童の活動記録をとることにより明らかにしたものである。

3.指導の実際

3.1.「話す・聞く」指導の実際

A児、B児とも本校に入学した時は、日本語を全く話すことができなかった。そこで、「ひろこさんのほんご」等の指導資料を使ったり、自作の資料を使ったりして指導を進めてきた。

日常の日本語を話せるようにするためには、まず、語彙を増やす指導から始めた。そのために実物を使う、絵・写真・イラスト等を見せる、動作を行う、他の表現と言い換える、例文を示す、語義を説明する等の手法を取り入れ、繰り返し指導してきた。

さらに、基本的な文型を口まねして言う練

習、文の一部を入れ替えて新しい文を作る練習、否定形、疑問形、過去形等に換える練習、2つの文を合わせて新しい文を作る練習、修飾語等を加えて文を少しずつ詳しくする練習、教師の質問に児童が答える練習、児童同士で質問したり答えたりする練習を取り入れながら文法の指導を進めてきた。

3.2.「書く」指導の実際

A児、B児は、入学当時は日本語が書けなかった。文字の指導をしていく中でどのように書けるようになったか児童の変容を見てきた。

3.2.1.文字の指導

最初は、ひらがなブロックを使って文字指導をし、ひらがなが認識されたところで、このブロックを使って言葉作りをしていった。繰り返し指導していくことで「ありがとう」「ごめんなさい」等の簡単な言葉になってきた。次に、「リンゴ」「ウサギ」「ひこうき」等のカードを読み上げながら取っていくというゲームを行った。児童はゲームが大好きなので、すぐにいろいろな言葉を覚えることができた。

上記のような指導をした後、しりとりを行っていった。初めはなかなか続かなかったが、いろいろな言葉を覚えていく中で、スムーズに固有名詞を言ったり書いたりできるようになっていった。

3.2.2.作文の指導

C児は、「話す・聞く」、「読む」はできるが、「書く」ことが苦手であった。自分の思いや考えを入れながら「書く」ことができるようになるために段階を踏んだ指導を工夫してきた。

短文作りは、文章を書くための基礎となる。できるだけ多く短文作りをさせた。特に、行事は、動機づけや集材のよい機会となった。

継続して短文作りをしていく中で、既習の漢字が使えるようになっていたり、いろいろな日本語の表現を使ったりして書けるようになった。

次に「書く」ことに興味を持たせるために絵本作りを行った。原稿用紙になかなか書けない児童がイラストを入れながら書くと楽しく取り組むことができるようになった。

その後、テーマをもとに、自分が書きたいことをカードに書いた。そのカードを見ながら話し合いをし、並び替えていった。また、文と文をつなげるためにはどのようにすればよいかを考えながら構成図を作成して、それをもとに作文を書く練習をしてきた。

最後に、自分で作文を書く⇒自分が書いた作文を読み直して訂正していく⇒担任と一緒に読み直して訂正する⇒清書するという段階を踏んで作文指導を進めてきた。

4. 児童の変容

4.1. 日本語指導教室

A児、B児を抽出して、上記で述べた指導を通して日本語指導教室に来た時に交わした会話を継続して録音し、児童がどのような表現を使えるようになったかを調べて変容を見ていった。その結果、指導を続けていく中で、初めのうちは「漢字」「学校」等の一語文だけで答えていたが、「ぼくは9時に寝たよ」「ブランコで遊んだよ」等の「単文」で答えられるようになり、さらには、「誕生会でケーキを食べてたよ。リンゴジュースも飲んだよ。」等の二文以上でも答えられるようになってきた。このように、聞いて話すことができるようになった。

また、「書く」指導においては、最初は、「色がきれい」のような単語と単語を「～が～」でつなげる文が書けるだけだったが、自分が見たものに、副詞「とても」+「きれい」とつなげて「とてもきれい」と書けるようになってきた。さらには、「友達と一緒に遊びたいな」等の自分の考えや気持ちを表す表現がで

きるようになった。「雨が降っているから、かさを持って学校に行って勉強するからね」というように単文から複文へと書く内容が変わってきた。

初めは、作文を書くのが苦手であったが、話し合ったり、視覚的に文の構成を考えさせたりして段階を踏んで指導していくことで、楽しく文章を書くことができるようになってきた。

4.2. 在籍学級

A児、B児は、自分の思っていることや考えていることを相手に伝えようとする姿が見られるようになったことにより、学級担任や友達との関わりを多く持つことができるようになった。また、少しずつ自分の考えを入れながら文を書くこともできるようになった。

C児は、作文の書き方が分かってきて意欲的に取り組む姿が見られるようになり、各教科でも考えを書いたり、わかったことを書いたりすることができるようになった。

友達との遊びや授業の中で、自分の思いや考えを進んで表現し生き生きと活動できるようになってきた。

5. まとめ

日本語の「話す・聞く」「書く」の指導において、何を身に付けさせるかというポイントを明確にして、段階を踏んで指導していくことで、スムーズに習得させることができた。

日本語が話せずに教室では、なかなか授業に参加できなかった児童に日本語指導を継続していくことで、授業の中で発表したり、友達と話し合ったりして、楽しく学校生活を送ることができるようになってきた。

以上のように、日本語を習得させることで、学校生活へ適応させ、在籍学級の中でも生き生きと自己実現できるようになったことは大きな成果と言える。さらに、児童が意欲的に日本語の学習に取り組めるような教材の開発をしていくことは、今後の課題である。